

## 街の弁護士から最高裁判事に就任した

ひと

やまうら よしき  
山浦 善樹 さん(65)

自分と2人の事務員。東京・神田の街中にある小さな事務所の「マチ弁」から、弁護士会の推薦を受け、「法の番人」に転身した。長野県旧丸子町(現上田市)出身。一橋大を出て銀行に就職したが、肌に合わず1年で退職した。道に迷ったとき、無医村で診療所を開いた妻の父の生き方が浮かんだ。困っている患者がいれば夜中

も山道をスクーターで往診した。「私もそんな人間になりたい」1年で司法試験に合格した。だが、恩師の禅寺の和尚に報告する

と「お氣の毒に」。戸惑った。歴史に残る大事件を手がけたことはない。夫の暴力に悩む女性、障害者、公害患者。依頼を一つひとつ解決して10年たったころ、和尚の真意に気づいた。「自分のためではなく、不幸な人のために生きなさい、ということか」7年間、法科大学院でも教えてきた。学生に必ず伝えたのは20年前の小さな店の立ち退き問題だ。経営者の女性は移転を拒む理由を言わなかつた。3カ月通うと、学徒出陣した恋人と店で再会を誓つていたと教えてくれた。約束から40年過ぎていた。「きっと彼も分かつてくれる」。数日後、「あなたに任せた」と連絡がきた。

「法律は人を幸せにする道具。記録に埋もれた当事者の苦しみを牛ヤツチして、判断していくたい」